

比叡山延暦寺を訪れて (そして身延山久遠寺)

(一社) ニューガラスフォーラム

小林 勝

Visit to the HIEIZAN ENRYAKUJI (and MINOBUSAN KUONJI)

Masaru Kobayashi
New Glass Forum

1. はじめに

何年か前までは、「60歳＝還暦」は、漠然とまだまだ先のことであると思っていたと同時に、何か特別な響が私の中にあった。しかしながら、実際にその時期を迎えてみると、継続的に仕事をしていたこともあって、あっけなく過ぎてしまったような気がする。とはいえ、一つの節目の年齢を境にして、いくつか、自分自身の感性や感覚が変わってきたようには感じている。

その一つが、「お寺」への関心が高まったこと、である。とはいっても、私の場合、深い信仰心によるものではなく、何百年に渡って存在する日本の偉大な遺産にふれ、仏像や建築物、襖絵や天井画などの美術、庭園などを楽しむ、といった、多分に観光的要素の強いものではある。いくつかの著名な寺社については、小さい頃から、様々な場所を何度も訪れてはいるが、歴史や背景等を知見としつつ、古刹を詣でる気持ち、を、わずかながらでも持てるようになったことは、これまでとは随分異なるように思う。そのきっかけの一つは、作家、五木寛之氏著作の「百寺巡礼」である。現在はTVでも放映されているが、これの良いところは、古刹を一般的に紹介するだけでなく、一人の作家として、

その背景などを探りつつ、普通なら気づかないようなことも合わせて記述されている点にあると思う。

2. 比叡山延暦寺

私は、現在は、お寺を巡る時間的な自由度は多くなく、東京都内や鎌倉、帰省した際の滋賀・京都・奈良を中心にランダムに参拝する状況ではある。そんな中、昨年の夏、旧盆の行事で滋賀県大津市の実家に行った際、比叡山延暦寺を参拝することができた。私の実家（今は誰も住んでいないが）は大津市の湖西側にあり、比叡山は、その山容を仰ぎ見る位置にある。また、高校まで、大津市内の学校に通っていたこともあって、小学校の遠足やハイキング等で何度か登ったこともある、たいへん馴染みが深い山でもある。しかしながら、大いに不思議ではあるが、延暦寺を、ゆっくりと歴史や背景を思いながら参拝した経験は無く、比叡山に登ることすら、多分30～40年ぶりだったかも知れない。そういう意味では、比叡山は、私にとって、近くて遠い存在であった。

比叡山は、京の都であった平安京の表鬼門（北東）に位置し、現在では、京都の観光スポットとしてもよく紹介されている。従って、京都観光に付随して、京都側から山に入る人が多

い。しかしながら、元滋賀県民だから言うわけではないが、延暦寺はもとより、比叡山の所在地は大津市であり、また、霊山の雰囲気味わうならば、ほとんど観光地化されてない大津市側から訪れることをお勧めしたい。

比叡山に登るコースの一つは、麓の山王総本宮日吉大社（全国の日吉・日枝神社の総本宮）横の石段を登っていくルートで、比叡山の修験道の一つにほぼ沿っている直登ルートである。この道は、昔は、大津市の小学校の遠足コースでもあって、私も2回ほど登った記憶がある。ただ今回は、前夜に雨が降ったこともあり、すぐ近くに山麓駅がある坂本ケーブルを利用して登った。

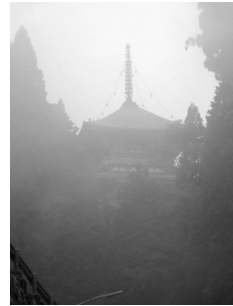


坂本ケーブル

このケーブルカーは現在、日本最長で、歴史も古く（パンフレットによると1927年開業）、途中に2駅がある珍しい構造である。また、比叡山の景観を損ねないように、大津市側からは路線が見えにくいように敷設されており、直線ではなく、曲がったり、トンネルを潜ったりもする。さらに起点と終点の両駅周辺には、観光地によくあるような店も無く、最初から霊山の雰囲気味わうことができる。

比叡山延暦寺は総称で、比叡山の尾根に沿って、東塔地域、西塔地域、横川（“よかわ”と読む）地域を中心にお堂が点在している。この日は、始めに、ケーブルの終点駅から、数百メートルの林道を歩いて、延暦寺の主たるお堂である、国宝の根本中堂に向かった。その道は、雨上がりでもあって、霧に霞む森が、良い

風情を醸し出していた。しばらくすると、霧の中の見上げる方向に、法華総持院東塔が浮かび上がってくる頃、延暦寺東塔地域に到着する。



霧の中の法華総持院



比叡山延暦寺入口

根本中堂は伝教大師（最澄）によって788年に創建された。日本にある多くの寺院の本堂は、その大屋根を見上げるものがほとんどであるが、ここ延暦寺では、“根本中堂”と書かれた石柱から見ると、中堂の大きな屋根がほぼ目線の高さに見える。つまり入口にあたる場所からは、石段を降りて中堂に向かうことになる。このような配置は、西塔地域にある釈迦堂も同



根本中堂の石碑



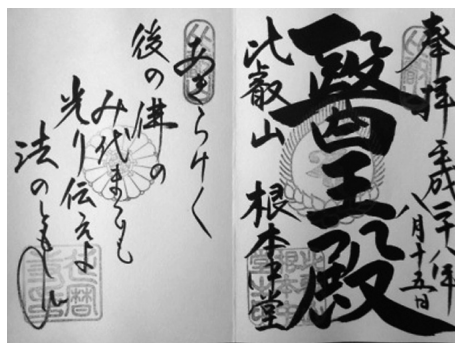
石段上から見た根本中堂

様であるが、谷間にお堂が配置されている構造は日本では珍しいと聞いたことがある。

根本中堂は回廊式になっており、その内部はかなり薄暗い。また、参詣者が入ることができる外陣よりもご本尊が安置される内陣はかなり低い位置になっており、ご本尊がほぼ眼の高さに配置されている。これは天台仏堂の特色だそうである。内陣のご本尊の近くには、3つの吊り籠状のものが見えるが、これが「不滅の法灯」である。1200年もの間、灯し続けられたと伝えられるが、実は、今回、法話で聞いたところ、この法灯は、織田信長の比叡山焼き討ちの際に一度消えたそうである。その後、中堂が再建された際に、元々分燈されていた、山形県の立石寺（山寺）から、逆分燈されて現在に至っているそうだ。とはいっても綿々と「灯」として、維持されていることには変わりなく、歴史を感じる景色でもあった。この法灯を見ていて、かつて入社した際、当時のトップが入社式で語っていた「一隅を照らす」という言葉を思い出した。延暦寺では、それに関連した様々な活動が、今でも行われているようである。内陣の手前には、さらに低い場所があり、そこは眼を凝らしても暗くてよく見えないが、僧侶が修行する場であるようだ。このときも、読経の声が聞こえてきたが、何か非常に厳かな雰囲気を感じることができた。

ちなみに、根本中堂は、2016年10月から10年間の予定で平成の大改修が行われている。10年後には、おそらく色鮮やかな中堂に生まれ変

わるであろうが、良き古さを醸し出している最後の姿を拝見できたことは幸運だったように思う。



根本中堂ご朱印とご詠歌
(西国三十三所観音霊場番外)

東塔地域にあるいくつかのお堂を参拝した後、山内バスで横川地域へ移動した。中心をなす本堂は横川中堂であり、遣唐使船を模したと言われる朱鮮やかな舞台造りとなっている。



横川中堂

この横川中堂からしばらく坂道を登ると、四季講堂がある。ここは、別名、元三大師堂といって、元三慈恵大師を祀っているが、おみくじ発祥の地として有名である。とはいっても、このおみくじは、現在のものとは異なり、悩み事などを紙に書き、それについて大師がご祈祷をするといった内容であったようだ。横川地域は、延暦寺の中心をなす東塔地域から少々離れているため、観光客も少なく、全体的に静寂に包まれた雰囲気を楽しむことができる。

最後に、東塔地域へ戻る途中、西塔地域を訪れた。ここにある、にない堂は、法華堂と常行



四季講堂



石段上から見た釈迦堂
(視線の高さに大屋根)



魔除けの角大師



おみくじ発祥の地石碑

堂という修行堂が渡り廊下で結ばれており、弁慶が天秤棒として担いだという故事から命名されている。比叡山では、山の峰々を巡って礼拝する千日回峰行が有名であるが、ここで行われる修行（四種三昧行という）は、最も古い基本的な修行だそうである。お堂の中で90日間座り続ける、あるいは、念仏を唱えながら、本尊周りを90日間回りつづける（休憩は紐を支えに立ったまま）などで、少し前にテレビで見た

時には、どうしてこんな修行が可能なのか、と思うものばかりであった。この日も修行中だったようで、大きな音（話し声）厳禁、お堂に近づくことも不可であった。



常行堂（このときも修行中）

再び東塔地域に戻った後、ケーブルカーで山麓に戻ったが、町並みに入った途端、つい先ほどまでいた場所が別世界のように、大いに宗教的な感銘を受けたことを今でも思い出す。延暦寺でも、ある期間には特別な公開が行われることがある。今回は、駆け足だったが、幸いにも、実家が至近距離にあることから、今度はそのような機会を計って、再び訪れたいと思う。

3. 身延山久遠寺

今年の5月の連休の最中、かねてから行ってみたかった山梨県の身延山久遠寺を参拝した。ここは日蓮宗総本山であるが、例によって、宗教とはあまり関係なく、観光要素を含んだお参

りであった。



身延山久遠寺三門



身延山久遠寺本堂

私は日蓮宗のお寺には縁がなかったので、その意味で興味があつたが、目的の一つは、麓の三門から本堂境内に向かう途中に聳える菩提梯にあった。菩提梯とは、高低差 104 m の直線状の石段で、合計 287 段ある。いろいろと紹介されていたことから知り、挑戦してみたかった石段であった。

菩提梯の石段は、計算すると、一段の高さが約 35 cm もあり、かつ勾配が極めて急なことが特徴である。よく見れば、出発点の横に不安を煽る(?) 様な注意書きがある。それを横目にして、いざ登り始めてみれば、想像以上にきつく(怖く?)、結果は、石段のほぼ真ん中で挫折。その後は、そこで交差する男坂を通して登り切った。この菩提梯は、7 区間(南・無・妙・法・蓮・華・経)に区分されているらしく、登り切れば涅槃に達するという意味があるそうだが、残念なことに、“南・無・妙”くらいしか達せられなかったことになる。ただ迂回路の坂では周囲に気を配る余裕ができ、途中で出会った白装束の一行が山に響くお経を唱えな



菩提梯



菩提梯横にある注意書き

がら下っていく様は、ちょっと現実を離れた気分になった。

ちなみに、久遠寺には奥の院がある。一般的に、奥の院は険しい場所にあるが、ここでは、標高 1153 m の身延山山上にある奥の院まで、本堂から約 750 m 余りの標高差を一気にロープウェイで上がることができる。奥の院は、日蓮聖人が登詣され、両親の追善を祈った場所とされ、思親閣と呼ばれる場所であるが、何よりも展望が良く、富士川を隔てた先には富士山が、そして反対側からは、高さ日本 2 番目の北岳もくっきりと眺めることができた。これだけでも訪れた価値があったと思う。

4. おわりに

今は、少ない機会でのお寺巡りではあるが、それでも、お参りの証として頂いた御朱印を集めた御朱印帳はすでに 4 冊目に入った。また、件の「百寺巡礼」に記載されたお寺では 28 の寺を訪れている(これはずっと以前からを含めて)。今後暫くは、このような形でお寺を訪れ



奥の院思親閣



久遠寺ご首題



身延山山頂からの富士山

ることになるだろうが、やがては、何らかの目標を持って参拝したいとも思う。それは、霊場巡りか、札所巡りか、あるいは「百寺巡礼」に準えて目標をたてるか、今は何も決めていない。いずれにしても、日本の優れた歴史遺産にふれながら、いつまでも心豊かな人でありたいと思う。